宮崎の神話

MYTHOLOGY
OF MIYAZAKI CITY

神話のふるさと
「みやざき」
古事記編纂1300年
-2012年-

(社) 宮崎市観光協会

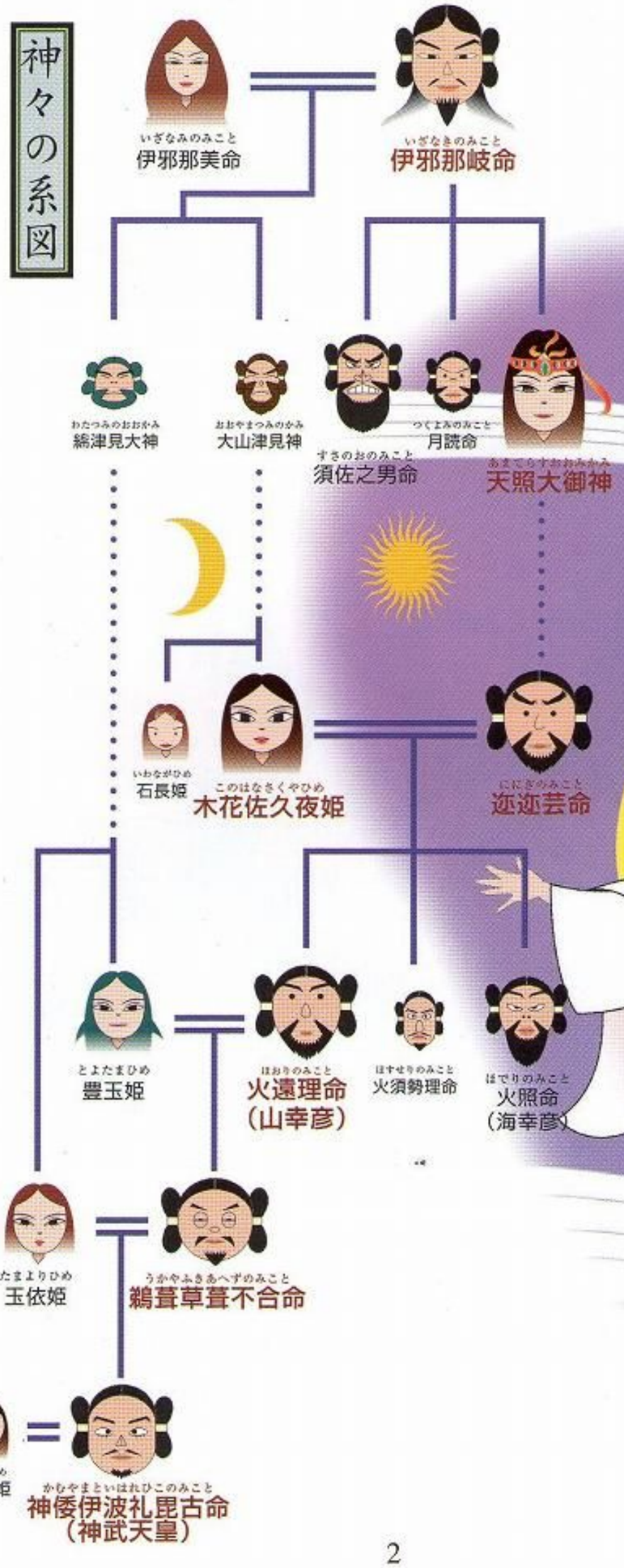
宮崎の神話

国生み神話から天孫降臨、そして神武天皇まで、古事記のハイライトともいえる物語の舞台となった宮崎は、まさに神々のふるさと。はるかな古代への入り口は街角のあちこちにひっそりと扉を開けている。神話をめぐる小さな旅へ出かけてみよう。

街角のあちこちに古代への入り口が待っている。宮崎は古事記の世界へのタイムトンネルだ。

世界のほとんどの神様は天地創造をするけれど、日本の場合は男女神である伊邪那岐命、伊邪那美命が「生む」ことによって国土ができたということになっている。まず、淡路、四国を生み、次に隠岐、九州、壱岐、対馬、佐渡を生み、さらに本州を生んで、大八島国という名ができた。両神が生んだのは国土だけでなく、太陽の神・天照大御神をはじめとする三十五柱もの神々も生んだ。

ギリシア神話にも匹敵する古事記のダイナミックな物語は、すべて両神が生んだ神々の子孫たちが演じることになる。



古事記の神々は阿波岐原で生まれた。

こうして世界を構成するあらゆる神を生んだ伊邪那美命は、最後に火の神である迦具土神を生み、やけどを負って死んでしまう。これを嘆いた伊邪那岐命は、妻を黄泉の国まで追っていくが、そこで汚れを受け、あわてて逃げ帰って史上初めて「みそぎ」をする。

みそぎの時に生まれたのが、高天ケ原の支配者となる太陽の神・天照大御神、それに八岐の大蛇を退治した荒ぶる神・須佐之男命、暦の神である月読命など古事記のスーパースター的な神々だ。

みそぎはここから始まった。国生み神話のイザナキ、イザナミを祠る江田神社に、壮大な天地創造の物語を思う。

「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原」と、祓詞（はらえことば）に今も残る宮崎市阿波岐原にある江田神社（創建不祥）は、国生み神話で知られる伊邪那岐命、伊邪那美命の両神を祠る。

妻である伊邪那美命を追って黄泉の国へ行く伊邪那岐命は、そこでおそろしい目に会い、その汚れを祓うために阿波岐原で「禊祓（みそぎはらえ）」をした、と古事記にあることから、阿波岐原はみそぎ発祥の地であるとされ、近くにはみそぎ池がある。

また、毎年六月と十二月に半年分のお祓いをする、「オンバレさま」という浜下りの特殊神事が行われる。

国を生み、主要な神々を生み、さらに黄泉（よみ）の国にまで出かけていった、神のダイナミックな物語を伝える江田神社は、今も森の中にひっそりとたたずんでいる。

その場所が、今の神主さんの祓詞に残る「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原」であると古事記は伝える。

筑紫は九州、日向はもちろん宮崎のこと。橘は通りに名を残し、小戸神社も現存するし、阿波岐原はシーガイアのある一ツ葉海岸の一角の地名。そして阿波岐原には、伊邪那岐命、伊邪那美命を祠る江田神社がある。つまり、古事記には、宮崎で生まれた神々や、宮崎の地名がたくさん出てくるという訳だ。

日向灘から打ち寄せる荒波に向かい、その澄んだ海の気を浴びながら、古代の壮大な物語を思ってみよう。

シーガイアのある阿波岐原で神は「みそぎ」をし、太陽の神を生んだ。

●江田神社

●みそぎ池

●シーガイア

太陽の神が天の岩戸に隠れた時、神々は陽気に踊り「宴」を催した。

天の岩戸に太陽神が隠れた。

阿波岐原で生まれた天照大御神は、女性神として母のような包容力で神々の国・高天ヶ原を治めていた。時に卑弥呼との共通性を指摘する人がいるように、女系社会の原型がここにあったのか、あるいは太陽を支配することで万物の母としての存在感を示していたのか。

とにかくも、世界の陽性と正義と平和を象徴する天照大御神のもとで穏やかに過ごしていた高天ヶ原に、暴れ者が乱入することになる。弟の荒ぶる神・須佐之男命だ。生皮を剥いだ馬を機織り小屋へ投げ込むわ、驚いて死ぬ者はあるわという大騒ぎの後、怒った天照大御神は天の岩戸に引きこもってしまい、世は闇に閉ざされる。

困った八百万の神々が今後の対策を練ったのが高千穂にある天安河原。相談の後、芸達者の天宇受売命に陽気きわまりない踊りを踊らせ、それを肴にみんなでその周りで宴会を始めた。

その騒ぎを聞きつけた天照大御神が、何事ならんと顔をのぞかせたところを、力自慢の手力男命が引き出して、世は光を取り戻すことになる。

こうした物語を描いているのが岩戸神楽をはじめ、宮崎県内に数多く伝承されている神楽だ。そして高千穂にはこの神話を伝える天岩戸神社もある。須佐之男命は高天ヶ原を追われて出雲の国へたどりつき、やがて国つ神（土着の神）の祖となる。天つ神（高天ヶ原由来の神）と、国つ神との融合という重要なイベントが後に起こるのだけれど、この騒ぎはこの伏線となっている。

●天安河原（天岩戸神社）高千穂町

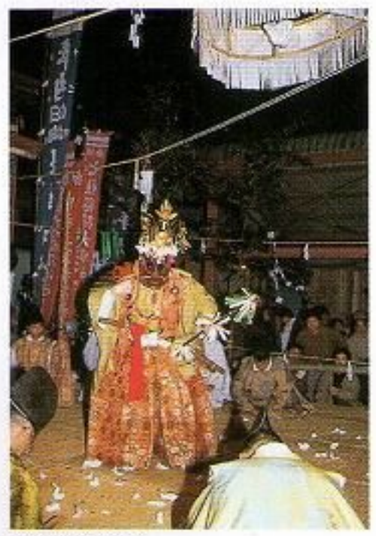
天孫降臨は二つの文化の融合を示唆する？

天孫降臨は、圧倒的な支配者がやってきて、土着の者どもを従えるというイメージがあるけれど、ことはそう簡単ではなかったようだ。

葦原の中つ国（地上の国のこと）を治めようと天照大御神は何度も使者を送るが、須佐之男命の子孫である大国主命にうまくいいくるめられて従わない。やがて高天ケ原でも武勇の優れた二柱の神様が降り立ち、今度は大国主命も国を譲ることを約束する。晴れて天照大御神の子たちが国を治めることになったのである。

迩迩芸命は「筑紫の日向の高千穂のくじふる峰」に降臨する。この時三種の神器（勾玉、鏡、剣）を持ち、たくさんのお供の神たちをともなった。高千穂がどこであるか高千穂町か霧島か、今も結論は出ない。

そして迩迩芸命は大山津見神の娘、木花佐久夜姫という美しい妻をめとることになる。これが実に重要なことで、天つ神と国つ神の初めての婚姻ということになるわけである。二つの文化の融合が象徴的に現れているかの



●銀鏡神楽

●木花神社

日向三代

天孫降臨し、迩迩芸命と木花佐久夜姫はめでたく結ばれ、海幸彦、山幸彦の登場となる。

ようだ。ところでこの求婚の際、大山津見神は木花佐久夜姫とともに、姉の石長姫も一緒に結婚をさせるつもりだった。子孫たちが、木の花の咲くように栄え、岩のように永く続くことを願ってという親心だったのだけれど、どうもこの石長姫はご面相がよくなかった。どのくらいよくなかったかというと、あまりのルックスに驚いた迩迩芸命が一日で親元に帰してしまったというほどのものだった。末永き幸の願いが込められた石長姫を邪険にしてしまったおかげで迩迩芸命の子孫たちの寿命は、以来、木の花のようにもろくはかないものになったという。

宮崎地方に古くから残る伝説によると、この時に、境遇を嘆いた石長姫が、わが姿を映す鏡を遠くへ放り投げたところ、これが現在の西都市銀鏡付近に落ちて、鏡を御神体とする銀鏡神社の由来となったという。ここには銀鏡神楽という独特の神楽も伝わっている。山の神は醜い女性であるとする地方は多いけれど、どうもこの話が基になっているらしい。

ともあれ、迩迩芸命と木花佐久夜姫はめでたくも結ばれ、二人はやがて、火照命（海幸彦）、火遠理命（山幸彦）ら三人の子をもうけることになる。

木花佐久夜姫の出産と木花神社

木花佐久夜姫の伝説地が、木花である。

海幸彦、山幸彦らを産んだ木花佐久夜姫だけれど、その出産も大変なものだった。「一夜の契り」を疑う迩迩芸命に対して、産む間際になって産室に火を放ち「この炎の中で無事に産むことで証しをたてましょう」ということになったわけである。よほど気丈な女神だったにちがいない。

この時の産室は戸をすべてふさいでしまったことから無戸室と呼ばれ、その跡とされるものが宮崎市木花の木花神社の近くにある。

また、境内には出産の際に産湯をつかったとされる桜川という泉が湧いている。この木花佐久夜姫が壮絶な出産をした宮崎市木花は、山幸彦が訪ねた海神の宮があったという青島の近くにある。

青島・木花は、海幸彦、山幸彦の遊び場だった。

木花で産まれた海幸彦、山幸彦の兄弟は、兄海幸彦は青島あたりで魚をとり、弟山幸彦は加江田渓谷から鰐塚山あたりでウサギを追ったりしていたのだろうかと想像してみるのも楽しい。

海幸彦と山幸彦。

天つ神と国つ神の間に産まれた初めての神である海幸彦と山幸彦。兄は海のものを弟は山のものをと、それぞれに領分を決めて暮らしていたが、山幸彦は「たまには交代してみたい。どうか道具を貸してほしい」と海幸彦に頼んで、一日漁師になってみた。

ところが慣れないせいで、兄が宝としていた釣針を魚に取られて無くしてしまう。兄は怒り、どうしても許してくれない。しまいには自分の剣をつぶして針を作って持っていっても、あの針でなくてはだめだという。

途方に暮れて海を見つめていたところ、向こうからやってきた老人あり。これが塩椎神という人物で訳を話すと、「それなら綿津見大神（海の神）の宮へ行きなさい」と教えてくれる。

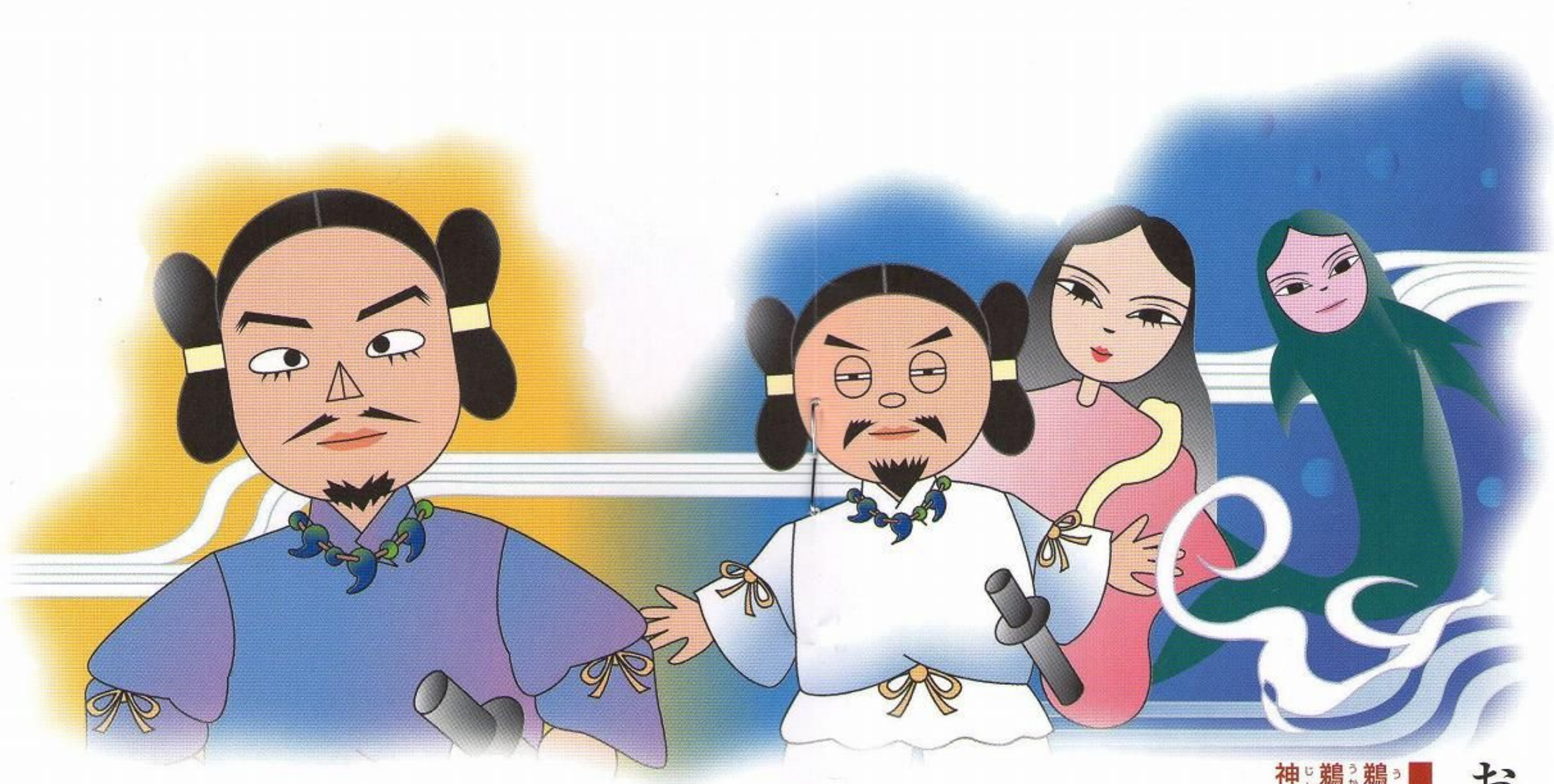
言われるままに訪ねた宮で山幸彦は、綿津見大神の娘、豊玉姫と結ばれて三年の間、楽しく暮らす。

広くいえば山の文化と海の文化がここで結ばれることになり、このあたりは、「天孫」を媒介にして日本という国が統合されていくさまを表しているかのようだ。

さて、この綿津見大神の宮は青島沖にあったとされ、青島神社は山幸彦と豊玉姫を祠っている。また、山幸彦が三年の後に帰ってくる際、村人が海に飛び込んで迎えたという故事にちなんで、今でも青島では「裸詣り」というお祭が行われている。

●裸詣り

●青島神社



お乳岩の伝説と神武天皇。

鵜戸の洞窟で産まれた鵜葺草葺不合命は、神武天皇の父となった。

海の宮で釣針も見つけ、陸に戻った山幸彦のもとに豊玉姫が現れ、「これから出産します、決して中を見ないように」と言う。

そこで山幸彦は、大急ぎで海辺の洞窟に産室を建てはじめるが、見るなと言われると見たくなるもの、山幸彦は中をのぞいてしまう。

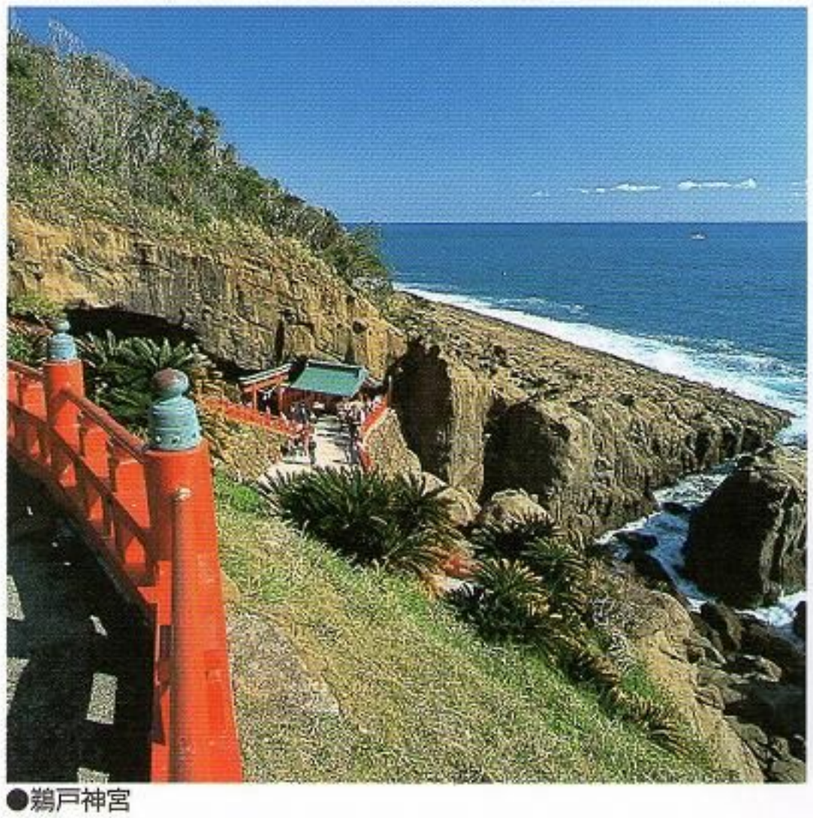
すると、中では大きなワニ(鮫とも龍とも言われている)の姿があった。海の一族は子を産む時に本来の姿に戻らなくてはならない。それを見られたことを嘆いた豊玉姫は産まれたばかりの子を残して去ってしまうことになる。

しかし、洞窟の岩からしたたり落ちる水を乳がわりにして子供は見事に育った。これが鵜戸神宮(日南市)に今も残るお乳岩の伝説だ。産室の屋根に鵜の羽を、十分にふき終わる前に産まれたこの子の名前は、鵜葺草葺不合命。やがて豊玉姫の妹である玉依姫を妻として四人の子供をもうけるのだが、その末弟が神倭伊波礼毘古命。

神倭伊波礼毘古命は、日本の中央部に国を開こうと思い、大勢の供を率いて美々津から船出し、東に向かった。

●宮崎神宮

後に大和地方を平定して国を開き、橿原の宮を建て第一代の天皇となった。これが神武天皇である。日向は天皇家のふるさとになった。



●鵜戸神宮

美々津から東を目指す。

神武東征。神話から歴史への入り口。

幼少の時代を今の西諸県郡高原町あたりで過ごしたとされる神武天皇は、長じて宮崎へ移り、兄の五瀬命らとともに国家統一を思案しはじめることになる。その時にあった皇居跡が宮崎市平和台公園の近くにある皇宮屋。すぐそばには、神武天皇を祠る宮崎神宮がある。

この地から天下を眺め渡した時、やはりどうもここは西へ寄りすぎているのではないかということになり、兵をまとめて美々津の港から東をめざした。いわゆる神武東征である。

この時点で日向三代の神話は終り、物語は神話からそろそろ歴史の入り口へと移り変わっていく。

●皇宮屋